

県民の本棚～であい、ふれあい「ちばの本」～〔高校生向け〕

「県民の本棚～みんなが選んだ『ちばの一冊』～」で推薦された本の中から、高校生の読書活動推進に資する本の一部を紹介します。

- ・「県民の本棚」の詳細は千葉県立図書館ホームページをご覧ください。
- ・本文は「県民の本棚」に寄せられた「推薦の理由」から抜粋しました。＊は図書館で加えたものです。

物語

『あぼやん』 新野剛志 著 文藝春秋 2008

「あぼやん」とは出世コースを外れた空港勤務のこと。旅行代理店で、女性がメインの空港にとばされた「あぼやん」遠藤のおはなし。空港の様々な仕事がよくわかる一冊。もちろん舞台は成田空港です。(女性 20代 習志野市)

＊続編に『恋する空港』(2010年刊)があります。

『埋火 一謙映院幾千子と堀田正睦』 秋本喜久子 著 新人物往来社 2007

幕末の佐倉藩主・堀田正睦とその義母幾久子が、貧窮する佐倉藩財政を立て直し、幕府の要となり開国に携わっていく過程を描いた物語。江戸から佐倉の国元へ下がる際の千葉の風景描写や佐倉高校の前身である藩校の始まり、佐倉順天堂の開祖・佐藤泰然の人柄なども描かれている。現在の佐倉の様子を知らない人でも、主人公である二人の微妙な関係とその時代の女性の立場の複雑さは十分楽しめます。(女性 40代 佐倉市)

『海を感じる時』 中沢けい 著 講談社 1980

著者は千葉県立安房高等学校卒業生。1978年、在学中に書いたこの作品で「群像新人文賞」を受賞。不安定で多感な少女期の異性体験と母と娘の対立をみずみずしい感性で鮮やかにとらえた作品。館山の海に囲まれて育った著者。女性の胎内の叫び声が、深い海の底から聞こえてくるようだ。(男性 50代 千葉市)

『永遠の出口』 森絵都 著 集英社 2003

この作品は、千葉・総武線を舞台にした小説。一人の少女が大人になるまでの総武線での様々なエピソードが語られている。自分の身の回りでも起こっていたような事件の数々もあり、青春時代をも思い出すようなこの主人公が、何気なく生活していた日々から大人へと成長する。その大人となった今の到着点を確認し、さらに未来へと続くのを確認する。出しゃばりすぎず、ポジティブな力を持った小説。(女性 30代 八千代市)

『定本岳物語』 椎名誠 著 集英社 1998

少年時代を千葉県で過ごした著者と息子・岳との物語です。岳少年の子ども特有のまっすぐさがほほえましく、なんだか懐かしさも感じます。そして、本を読んでいると、自分もすぐそばで成長を見守っているような気持ちになります。また、着かず離れずの絶妙な親子の距離にもあこがれます。(女性 40代 銚子市)

＊「岳物語」を加筆・再編成し、あとがき42枚、「岳」本人のエッセイ、生原稿の未発表短編を収録しています。

『天国までの百マイル』 浅田次郎 著 朝日新聞社 1998

千葉県を舞台にした作品で、知っている地名などが出てきて親近感を持ちました。内容についても主人公の母親への思いが強く、思わず涙が溢れそうな場面がありました。主人公の今後についても、余韻のある終わり方で心に残りました。(女性 40代 木更津市)

『南総里見八犬伝』 曲亭馬琴 【作】 石川博 編 角川学芸出版 2007

全国的に有名な千葉県を舞台にした作品です。とてもスケールの大きな話で「これが江戸時代に書かれたのか」と驚いたのをおぼえています。「八犬伝」は、様々な出版社から子ども向けのやさしいものや短くまとめたものも出ていますが、これは、幅広い年代の人が自分にあったものとして読めるのでお勧めです。(女性 ~10代 勝浦市)

『野菊の墓』 伊藤左千夫 著 新潮社 1968

作者の伊藤左千夫は千葉県山武郡の農家で生まれた明治後期を代表する小説家の一人です。本書は野菊の咲乱れる千葉県の田園風景を背景に描かれており、その素朴な風景がお互いに想い合う2人を取りまき、余計に悲しい出来事を引き立てています。また、主人公を視点としているのでとてもはなしに入りこみやすいです。とても切ない千葉県を舞台にくりひろげられた純愛、この感動を多くの人に読んでほしいです。

(女性 ~10代 夷隅郡大多喜町)

『四千万歩の男 全5巻』 井上ひさし 著 講談社 1992-1993

九十九里で生まれ、佐原の商家の婿養子となり代をなした伊能忠敬。第二の人生を子午線一度の長さを正確に測るため寛政12年(1800年)蝦夷に向けて一行を従え出発。毎日、五歩で二間、56歳から72歳までの17年間に地球1週をはるかに越える距離を踏破し日本地図を作り上げた。毎日の簡単な記録しか残されてはいないが、井上ひさしの手によって、歴史小説としても時代小説としても一級の読み物となっている。

(男性 50代 千葉市)

文学案内

『かくれみの街道をゆく -正岡子規の房総旅行-』 関宏夫 著 斎書房出版 2002

正岡子規が明治24年3月25日から4月2日にかけて房総横断旅行をした行程を「かくれみの街道」と名付けた。資料が充実しており、子規本人の青春譜として、また明治24年の世相、房総を読んだ子規自身の俳句等、千葉ゆかりの伊藤左千夫や高浜虚子、浅井忠などのことにも触れ、千葉の歴史満載の本である。(女性 50代 茂原市)

『書でめぐる房総文学の旅』 幕田魁心 書 笹生浩樹 写真・文 木耳社 2010

私自身、千葉で生まれ育ってきた一人ですが、全く知らなかった文学の世界がこの千葉県にも多く残っていることに気づき、感動しましたので、千葉県民である若者世代の方から、懐かしく感じることでござるご年配の方まで、幅広くの方に見ただけの本ではないかと思いました。私も書を学んでいますが、幕田先生の表情豊かな書と文学・写真がうまく調和していて、忙しい毎日に癒しをもたらしてくれます。最後のページにある、所在地の資料を参考に、これから千葉県内をめぐる、より千葉県の魅力を発見したいと思うとともに、芸術の秋に向けておすすめの本として推薦させていただきます。

(女性 20代 袖ヶ浦市)

『漱石の夏やすみ -房総紀行『木屑録』-』 高島俊男 著 筑摩書房 2007

「木屑録(ぼくせつろく)」は明治22年、学生だった漱石が23歳の夏やすみに友人4人と房総旅行に出掛け、その見聞を記した漢文による紀行文です。第52回読売文学賞「紀行・随筆賞」受賞作品でもあり、漢文で書かれた漱石の足跡や見聞の感想が分かりやすく解説されています。さらに、親友正岡子規の評価や、興味深い事実の数々もエピソードとともに解説されていることから、大学生や一般だけでなく、高校生が国語で学習する「こころ」の中に出てくる房総旅行の事実などがわかるので、高校生にも読んで貰いたい図書です。(女性 20代 市川市)

**『ふさの国文学めぐり』 再改訂版 千葉県高等学校教育研究会国語部会 編 富士出版印刷
2010**

本県高等学校の国語科の先生方による本書は、我が郷土千葉への郷愁と誇りを喚起させてくれる好著である。本県ゆかりの作家たちのエピソードや作品群、現代に視点を置いた新たな文学散歩のモデルコースの併記など、どのページをとっても興味がつきない。郷土を語るとき、文学は切り離せない大切な要素の一つであり、いにしへの昔から文学のふるさととしての房総が存在していることを改めて実感することができる著作であり、ガイドブックとしても優れた一冊である。(男性 50代 市川市)

エッセイ

『海風通信 -カモガワ開拓日記-』 村山由佳 絵と文 集英社 1996

夏、遊びに来た鴨川の海で、素潜りを楽しんだとたん鴨川の海が好きになり、引っ越しに来てしまった著者。房州の豊かな風土、山あり、海ありの鴨川で、著者自身も畑を耕し作物を作る。海釣りをして楽しむ。自身で作った作物や釣った魚や花などが、イラストや写真で紹介されている。房州人の気さくで温かい人柄などが書かれている。住んでみたいなどと思わせる一冊です。(女性 50代 銚子市)

『やきにく井、万歳！ -おやじの背中、息子の目線-』 佐藤洋二郎 著 松柏社 2006

おやじと息子について語ったエッセイ集。八千代市在住の小説家の著者が、3歳から16歳にかけての息子さんとの日常の関わりを、面白おかしく語っている。「神々廻(ししば)」という地名が読めるかと息子に聞かれ読めないでいると、じゃあ行ってみようと思かけていく二人。二人の掛け合いが面白い。(男性 50代 市原市)

スポーツ

**『あの夏、西の風が吹いた -銚子西高野球部の青春物語-』 小林信也 著
ベースボール・マガジン社 2008**

銚子市立西高等学校。平成20年3月銚子市立銚子高等学校と統合し、その名がなくなった学校です。創立6年目の昭和56年銚子商との県大会決勝を勝ちぬき、甲子園に出場という快挙を成し遂げました。学校は30年余りという短さで幕を閉じてしまいましたが、この本を読み、新しい学校で一つ一つ作り上げた野球部、そして、夢中で部活動に取り組んだ生徒の姿を知りました。多くの人に銚子市立西高等学校が、あったことを知ってほしいと思います。(女性 40代 銚子市)

『君ならできる』小出義雄 著 幻冬舎 2000

この本は、千葉県出身の陸上指導者の小出義雄さんの書いた本です。高橋尚子選手を中心に有森選手や千葉真子選手など小出監督の育成したトッププレイヤーのあり方や成長の過程などをわかりやすく示してあります。スポーツ関係者の人だけでなく様々な人に読んでもらいたい一冊です。(女性 ~10代 千葉市)

**『車椅子バスケのJリーガー -4度目のパラリンピック日本代表選手を目指して-』
京谷和幸 著 主婦の友社 2010**

ジェフユナイテッド市原所属のサッカー選手として将来を囑望されながら、事故で半身不随となった後、リハビリの一環で車椅子バスケを始めるようになり、千葉ホークスに所属し活躍する一方、パラリンピック日本代表にも3度選出された、京谷和幸さんとそれを支えた妻陽子さんの話。(未記入)

**『心のゴールにシュート！ ー千葉盲学校寄宿舎サッカーチーム「ペガサス」の挑戦ー』
鳥飼新市 文 篠利幸 写真 第三文明社 1994**

「ペガサス」はもう解散したようですが、ブラインド・サッカーは今やワールドカップが開催されるほどになりました。日本代表には県庁職員も選出されています。(未記入)
*千葉県立千葉盲学校寄宿舎のサッカーチームで全国初の盲学校サッカーチームの軌跡を描いた感動実話。

『房総白球伝 ー野球王国ちばの100年ー』 和田正樹 著 崙書房出版 1992

明治時代半ば、千葉県内で本格的に野球が行われるようになってから、約100年の間、県内で野球に情熱をそそいだ人々のエピソードが多く紹介されている。千葉県は代表校が甲子園で何度も優勝を果たし、多くの野球選手を輩出しているが、それは、多くの人々や無名の球児達の積み重ねた歴史のもとにあるのだと感じさせられる1冊である。若き日の長嶋茂雄や掛布雅之についてのエピソードも載っていて、特に野球が好きな人にはオススメである。(女性 30代 習志野市)

ひと

『ではまた明日』 西田英史 著 西田裕三 編 草思社 1995

私達と同じ高校生で腫瘍が見つかり、その病魔と明るく前向きに戦いつづける姿に勇気もらいました。大学受験だけでも大変なプレッシャーでくじけそうなのに、病気と闘い、受験に向かっていく精神力はすごいと思いました。ぜひ、この本から、困難にむかっていく力をもらってください。(女性 ~10代 香取市)

『何とかなるさ！ ーママは宇宙へ行ってきましたー』 山崎直子 著 サンマーク出版 2010

ある探査機の劇的な帰還をきっかけに広まりつつある「宇宙ブーム」。その中で千葉県は、飛行機が空に飛び立ってゆく成田国際空港や初日の出が日本一早い犬吠埼という地があり、またある意味ではロケット発祥の地でもあるちょっと宇宙に近い県です。そんな千葉県育ちの宇宙飛行士、山崎直子さんが2010年4月、実際に宇宙へ行き無事帰還しました。山崎さん執筆のこの本は、読者に夢を与え宇宙を通して千葉県を知ってもらえる一冊です。(女性 ~10代 香取市)

『弁護士渥美雅子』 板倉久子 著 理論社 1999

千葉県初の女性弁護士です。生き方として高校生にすすめている一冊です。
(女性 40代 習志野市)
*渥美さんは本書で「若い世代に今までの価値観にとらわれず、フレキシブル(柔軟)な頭とセンシティブ(敏感)な心を持って、21世紀の騎手として活躍してください。」とエールを送っています。

歴史

『千葉県の戦争遺跡をあるく ー戦跡ガイド&マップー』 千葉県歴史教育者協議会 編 国書刊行会 2004

幼い頃、父から千葉駅周辺が戦火に包まれたことをよく聞かされましたが、県内にこれほど戦争遺跡があるとは知りませんでした。県内に残る戦跡を18コースに分け、写真・遺構図・遺物図などを豊富に掲載して、当時の様子を伝えてくれます。学校の歴史の授業で調べ学習をする際にも役立ちそうです。(男性 30代 香取郡神崎町)

『千葉県の歴史一〇〇話』 川名登 編著 国書刊行会 2006

下総・上総・安房の3国を包む千葉県に、生活を続けてきた人びとの歴史を振り返り、100史話を収録した郷土歴史入門書。歴史を振り返ることで多くの示唆を与えてくれる。(男性 60代～ 千葉市)

『千葉の道千年物語 一房総の歴史街道を旅する一』 山本光正 監修 千葉日报社 2002

一言で道といっても、そこにはたくさんの歴史がある。道とは、「道」＝「未知」であり、これからの「未来を知る」ためのものではないだろうか？新たな「道」を知るために房総の歴史街道を寄り道してみてもいいか？(男性 20代 東金市)

**『ドン・ロドリゴの日本見聞録 一スペイン人の見た400年前の日本の姿一』
ドン・ロドリゴ [著] 安藤操 意訳・解説 たにぐち書店 2009**

約400年前に日本を訪れたスペイン人、ドン・ロドリゴによる見聞録を読みやすく編集。大多喜城から江戸・駿府城を経て、京都を観光した際の道中の見聞や、家康とのやりとり、当時の日本の習俗などの報告を意識し解説を付した一冊。江戸時代初期に日本を訪れた外国人と房総との接点や外国人が見た当時の日本及び日本人を知る一冊として推薦する。(男性 20代 市川市)

その他

『がんばれ！銚子電鉄 一ローカル鉄道とまちづくり一』 向後功作 著 日経BP社 2008

銚子の一部、たった6.4kmを走る銚子電鉄。小さな所領がゆっくりゆっくり走る姿は、忙しい毎日を忘れホッとさせてくれます。そんな銚子電の歴史や、ローカル鉄道についてさまざまなエピソードを共に綴られています。特に電車の修理代がなく、存続の危機に直面したときのエピソードは人の心の暖かさ、守りたいという社員の熱い思いに出会い、勇気と元気をもらえました。(女性 50代 香取市)

『旬・菜・記 一千葉はうまい一』 高山修一 著 嵩書房出版 2009

名のごとく、千葉の食材を語ります。知っているようで知らない野菜の産地などもわかって楽しめます。(女性 50代 八千代市)

*首都に隣接していながら、千葉県は豊かな山野河海の幸に恵まれ、生産量日本一の産物が多くあります。まさに食材の宝庫である千葉県の旬の味覚が伝わってくる一冊です。

『世界一空が美しい大陸南極の図鑑』 武田康男 文・写真 草思社 2010

著者は、第50次日本南極地域観測越冬隊員として南極で過ごした高校の先生です。調査研究を続ける中、業務以外の限られた時間に撮影したという貴重な写真は、どれもが素晴らしく感動的です。それらの写真を用いて、この本では自然現象の不思議を分かりやすく説明しています。ぜひ多くの方に読んでほしい一冊として、この本を推薦します。

(未記入)